

# これから感染症とどのように向き合っていくか

3年5組26番 原 千尋

## 1. はじめに

私がこのテーマにした理由は大河ドラマを観た際に見たことも聞いたこともない治療薬や治療方法等に興味を持ったことがきっかけである。また、持続可能な社会をつくるという観点において、現在世界を脅かしているパンデミックと我々はどのように向き合っていくべきなのかを知りたいと思ったからだ。そこで今回の新型コロナウイルス(以下COVID-19)とパンデミックであること、急速に世界中に拡大したこと、規模が似た感染症※1である約100年前に流行したスペイン風邪を主として現在欧米を中心に感染が拡大しているサル痘を含め感染症対策を比較・参考にし現代の感染症対策の仕方について探究したいと考えた。

## 2. 序論

スペイン風邪とは、1918年3月頃から1920年頃まで全世界に流行した感染症である。当時の世界人口約19億人の3分の1が感染、数千万人が死亡し、致死率は2.5%以上と推定されている。名前にスペインの国名がついているが、スペインが原発地であることを意味するのではない。当時は第一次世界大戦の最中であり、インフルエンザの感染爆発は軍の行動に大きな影響を与えることから、各国で報道が規制された。このため、中立国であったスペイン発の報道が初めてだったことに由来している。

COVID-19は2019年12月に中国の武漢で感染が報告されてから今日まで世界的に流行し沢山の犠牲者が出ている。そのため問題背景には変異株増加、感染者の自宅待機やホテル隔離、医療崩壊の恐れ、医療従事者の負担等がある。現在、陽性者数は2022年10月28日時点でのべ22,148,863人(空港・海港検疫、チャーター便帰国者含む)※2である。感染拡大に歯止めがかからず、コロナ患者病床数が8割を越えている病院や搬送までに丸一日以上かかることもある。

また、新たに1970年にザイール(現在のコンゴ民主共和国)でヒトでの初めて感染が確認された、オルソポックスウイルス属のサル痘ウイルスが中央アフリカから西アフリカを中心に流行している。ウイルスを保有しているリス、ネズミ(げっ歯類)、感染したサルなどの動物の、血液や体液に触れることで感染する。日本では(2022年10月28日現在)4例の感染報告が出ている。日本ではまだ少ないが、米国では一万人を超えワクチン対策が急がれている。サル痘は感染してから約2週間後に、39℃以上の高熱・倦怠感・頭痛・嘔吐などの全身症状が現れ、解熱し3~4日後に顔や四肢を中心に強い痛みや灼熱感を伴う斑状の皮疹が現れるという症状だ。 ※3※4※5

感染症と向き合うためには、私たち一人一人の対策が必要であり、もし次に新しい感染症が流行しても今までの対策を活かして拡大させないようにすることが必要だ。そこで、これから感染症と共存することは有効であるのかという仮説を立てた。

以上のような感染症に対して、文献を基に分析し、仮説に対し有効であることを述べる。

## 3. 本論

石谷誓子氏の論文「日本におけるスペイン風邪の流行と既存の結核との関連」※6によると、スペイン風邪流行当時の日本におけるスペイン風邪の対策は注意を促すポスターの配布や効き目のないワクチン接種の推奨を行う程度であり、結果として効果的なものはなかったのだ。それは、当時スペイン風邪のウイルスの発見には至らず、ワクチン開発が進まなかったためである。スペイン風邪について1918年当時の歴史記録や保存資料は、公的にほとんど残されていない。スペインかぜで亡くなった人々を記憶し追悼しようとする試みも行われなかった。当時の人々は、スペイン風邪疲れが積り、パンデミックの勢いが衰え始めると、将来に対する楽観論が生まれ、パンデミックを過去に押しやって暮らしたいと願うようになり、この辛い経験を早く忘れようとした

からだ。しかし、たったひとつだけスペイン風邪から学べる教訓がある。それは記録管理の重要性だ。収集された記録は次にやってくるであろうパンデミックに役立つに違いないから重要である。COVID-19は当初から図書館や史学団体、地方組織が、あらゆる記録の収集に乗り出している。こうした記録には、食料品店の店員、コロナウイルス検査所のボランティア、オンライン学習を受ける子どもや保護者たちなどへの聞き取り調査によって、コミュニティー全体への影響を把握しようとする取り組みも含まれている。また、COVID-19の犠牲となった人々に敬意を表するため、一時的な追悼の場も設けられた。しかし、私たちがスペイン風邪の時と同じようにCOVID-19を忘れようとするなら収集した記録の役目はない。\*7

現在と同様、ソーシャルディスタンスやマスクの着用等はあった。特に、これらの公衆衛生上の措置の重要性は、今も繰り返し語られるが、それは万能ではなく限界もある。米国立アレルギー感染症研究所所長のアンソニー・ファウチ氏の2021年8月9日付で医学誌*American Journal of Public Health*に掲載された論文“A Centenary Tale of Two Pandemics: The 1918 Influenza Pandemic and COVID-19, Part I”\*8には「20世紀を振り返ってみると、『すべての戦争を終わらせるための戦争(第一次世界大戦のこと)』は、戦争を終わらせることができなかった。そして過去最悪のパンデミックも、パンデミックを終わらせることはできなかった。1世紀がたった今も、悲劇的な戦争は起こり、悲劇的なパンデミックが発生し、世界はいまだにこれらの問題と戦っている」とある。パンデミックはこれからも発生すると考えられている。これは*Proceedings of the National Academy of Sciences*8月31日号に掲載された米デューク大学准教授のWilliam Pan氏らによる“Intensity and frequency of extreme novel epidemics”\*9で明らかになっている。Pan氏は、「COVID-19やスペイン風邪のような大規模な感染症のパンデミックは、決してまれなことではない。パンデミックの予防と対策にもっと力を入れるべきだ」と主張している。論文の共著者で、同大学教授のGabriel Katul氏は、「こうした結果が出たからといって、今後59年間はCOVID-19のようなパンデミックは発生しないと、あと数百年はスペイン風邪のような惨事は起きないと言えるわけではない。大規模なパンデミックはいつ起きてもおかしくない」と説明している。Pan氏も、「人口増加、環境破壊、食品流通システムの変化、病原体を保有する動物とヒトとの接触頻度の増加などにより、パンデミックの頻度はさらに増大する可能性がある」と推測している。

サル痘ウイルス感染症の世界的な感染拡大については、WHO(World Health Organization、世界保健機関)はPHEIC(Public Health Emergency of International Concern、国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態)を宣言した。サル痘ウイルスを含むオルソポックスウイルスに関連する出版物をパブリックリポジトリで即時アクセスできないため、現在は専門家以外の人はサル痘について詳しく知ることはできないが、公開されたら知識を身に付けてサル痘に打ち勝っていくべきである。\*10

また、スペイン風邪と同様にコロナ疲れが増加している。歴史家のナンシー・ブリストー氏は、「パンデミック前の普通の生活に戻ることは喜びだが、過去の歴史を振り返ると、簡単に元に戻ってしまうことは今回と今後のパンデミックの双方に悪影響をもたらす恐れもある」と考えている。パンデミック下で続けてきたことをやめられるという大きな変化には、パンデミックを忘れてしまう可能性が相当に伴うのだ。\*8

また、コロナ禍においておうち時間が増えていることにより人々の趣味や新しく挑戦することに変化が出ている。これも感染対策に繋がっているのだ。\*10稲葉々美氏の論文「コロナ渦における人々の余暇活動の変化」によると、「コロナ渦における余暇活動において、以前までできていた活動ができなくなってしまったからといって生活の中の癒しがなくなってしまったわけではなく、そんな中でも余暇を楽しもうとする人々は現在のスタイルに合わせた活動をしていることが改めて明らかになった。」と書かれている。2020年4月16日に全国に発令された緊急事態宣言の期間中、様々なおうち時間のスタイルが流行した。生活に役立つグッズや面白いアイテムを購入する人、凝った料理やお菓子を作る人、勉強をする人、投資を始める人、ゲームを楽しむ人、ダイエットをする人、お取り寄せやデリバリーをして料理を楽しむ人、のように普段仕事や学校で忙しくてできないことができて楽しむ人が多いように感じた。中では、すでに行っている活動が多く含まれ

ているかもしれないが、この機会に改めて自身の余暇活動やそれに対する満足感を振り返ること  
と新たな活動を始めるきっかけになり、外出しなくても個人の時間を有意義に過ごすことができ  
生活の質が豊かになるに違いない。\*11\*12\*13

#### 4. 結論

今回の研究を通して、COVID-19などの感染症と共存することは可能であると考え。もし  
COVID-19が収束しても新たな感染症は出現するため感染症を避けて生きていくことは不可能  
だ。しかし、今回のCOVID-19によって生活の仕方が変化しコロナ禍での生活が定着してきてい  
る。一人一人がさまざまなおうち時間のスタイルを確立していけばどの感染症にも対応できると  
考える。以前のような暮らしができるようにするにはどの感染症においてもマスクの着用・手洗い  
うがい・三密を避けるということは基本であるため今までと変わらず行っていくべきだ。

#### 5. おわりに

この探究をする前は、感染症について興味を示していなかったが探究を通して身近に感じ、興  
味が深まっていき、他人事として考えてはいけないうるようになった。人間が生きている以上感  
染症がなくなることはない。それには私たちがこのパンデミックを忘れずに世代を超えて伝えてい  
くことがなによりも大切である。私たちが未来のために何をするのが最善なのか、これから色々  
な感染症が流行しても今回培った知識を活かしていきたい。

#### 6. 参考文献・出典

\*1パンデミックの歴史 よみがえる「恐れ」の記憶(閲覧日2022年10月11日)

(<https://www.swissinfo.ch/jpn/%E6%96%B0%E5%9E%8B%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%8A%E3%82%A6%E3%82%A4%E3%83%AB%E3%82%B9-%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%8A%E7%A6%8D-%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%82%A4%E3%83%B3%E9%A2%A8%E9%82%AA-%E6%84%9F%E6%9F%93%E7%97%87/47181296>)

\*2厚生労働省ホームページ(閲覧日2022年10月11日)

([https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708\\_00001.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html))

\*3家来るドクター(閲覧日2022年10月11日)

(<https://iekuru-dr.com/blog/saruto/>)

\*4明治 からだカイゼン委員会(閲覧日2022年8月15日)

(<https://www.meiji.co.jp/karadakaizen/known/entry017.html>)

\*5名古屋検疫所(閲覧日2022年10月11日)

([https://www.forth.go.jp/keneki/nagoya/id/id\\_monkeypox.html](https://www.forth.go.jp/keneki/nagoya/id/id_monkeypox.html))

\*6「日本におけるスペイン風邪の流行と既存の結核との関連」石谷誓子 2006年  
(閲覧日2022年8月15日)

([https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/download.php/AN00234610-20061001-0083.pdf?file\\_id=100290](https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/download.php/AN00234610-20061001-0083.pdf?file_id=100290))

\*7経済産業省(閲覧日2022年10月11日)

(<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUD140DT0U2A310C2000000/>)

\*8米国立アレルギー感染症研究所所長 アンソニー・ファウチ

*American Journal of Public Health*の“A Centenary Tale of Two Pandemics: The 1918  
Influenza Pandemic and COVID-19, Part I”(閲覧日2022年8月15日)

\*9”Intensity and frequency of extreme novel epidemics”(閲覧日2022年10月11日)

Marco Marani, Gabriel G. Katul, William K. Pan, and Anthony J. Parolari  
(<https://project.nikkeibp.co.jp/behealth/atcl/news/overseas/00126/>)

(閲覧日2022年9月30日)

※10科学技術プラットフォーム(閲覧日2022年10月11日)

([https://jipsti.jst.go.jp/sti\\_updates/2022/08/13681.html](https://jipsti.jst.go.jp/sti_updates/2022/08/13681.html))

※11「コロナ渦における人々の余暇活動の変化」 稲菜々美 2021年

(閲覧日2022年8月15日)

([https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/academics/faculty/itm/sotsugyou\\_ronbun/1E10180194\\_\\_\\_.ashx?la=ja-JP&hash=70656934A90B0A38E094300EEB1](https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/academics/faculty/itm/sotsugyou_ronbun/1E10180194___.ashx?la=ja-JP&hash=70656934A90B0A38E094300EEB1))

※12経済産業省(閲覧日2022年10月11日)

([https://www.meti.go.jp/statistics/toppage/report/minikaisetsu/hitokoto\\_kako/20210528hitokoto.html](https://www.meti.go.jp/statistics/toppage/report/minikaisetsu/hitokoto_kako/20210528hitokoto.html))

※13aumo(閲覧日2022年10月11日)

(<https://aumo.jp/articles/690316>)